

Asia Indicators

発表日: 2024年9月13日(金)

インドのインフレ率は2ヶ月連続で中銀目標を下回ったが…(Asia Weekly(9/9~9/13))

~韓国の失業率は統計開始以来最低となるも、労働市場からの退出の動きも活発化している~

第一生命経済研究所 経済調査部

主席エコノミスト 西濱 徹(Tel:050-5474-7495)

○経済指標の振り返り

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
9/9(月)	(中国)8月消費者物価(前年比)	+0.6%	+0.5%	+0.5%
	8月生産者物価(前年比)	▲1.8%	▲1.4%	▲0.8%
	(台湾)8月輸出(前年比)	+16.8%	+7.3%	+3.1%
	8月輸入(前年比)	+11.8%	+15.0%	+16.2%
9/10(火)	(フィリピン)7月輸出(前年比)	+0.1%	--	▲17.3%
	7月輸入(前年比)	+7.2%	--	▲7.3%
	(マレーシア)7月鉱工業生産(前年比)	+5.3%	+4.5%	+5.0%
	(中国)8月輸出(前年比)	+8.7%	+6.5%	+7.0%
	8月輸入(前年比)	+0.5%	+2.0%	+7.2%
9/11(水)	(韓国)8月失業率(季調済)	2.4%	--	2.5%
9/12(木)	(インド)8月消費者物価(前年比)	+3.65%	+3.50%	+3.60%
	7月鉱工業生産(前年比)	+4.8%	+4.7%	+4.7%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

[インド]~食料インフレでインフレ率は2ヶ月連続で中銀目標を下回るも、コアインフレはわずかに加速~

12日に発表された8月の消費者物価は前年同月比+3.65%となり、前月(同+3.60%)から加速しているものの、2ヶ月連続で中銀(インド準備銀行)が定めるインフレ目標(4±2%)の中央値を下回る推移が続いている。前月比も+0.00%と前月(同+1.47%)から上昇ペースが鈍化しており、エネルギー価格は上昇基調が続いているものの、前月にかけて大幅に上昇してきた生鮮食料品をはじめとする食料品価格の上昇の動きが下落に転じるなど、生活必需品を中心とするインフレの動きに一服感が出ていることが影響している。なお、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+3.40%と前月(同+3.39%)からわずかに伸びが加速しており、5月以降は緩やかに底入れの動きを強める展開が続いている。前月比も+0.37%と前月(同+0.64%)からペースこそ鈍化するも上昇が続いており、エネルギー価格の上昇を反映して輸送コストに押し上げ圧力が掛かる展開が続いていることに加え、国際金融市場では米ドル安の動きがみられるにも拘らず、通貨ルピー相場は当局の為替介入の影響で最安値圏での推移が続くなど輸入インフレ圧力が掛かりやすい展開となるなかで幅広く財価格が上昇している。さらに、経済活動の正常化が進んでいることを反映してサービス物価も幅広く上昇しており、一般的にインフレ圧力が高まりつつある様子がうかがえる。

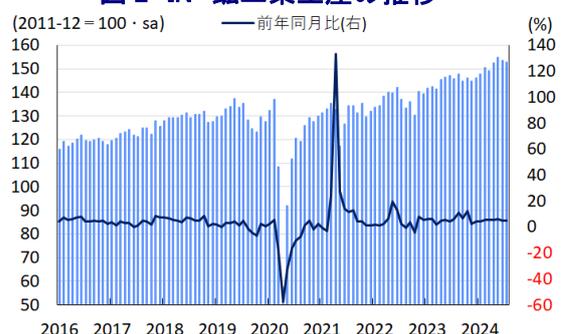
また、同日に発表された7月の鉱工業生産は前年同月比+4.8%となり、前月（同+4.7%）からわずかに伸びが加速している。ただし、当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比では2ヶ月連続で減少している上、中期的な基調も拡大傾向を維持するもそのペースは鈍化するなど頭打ちの動きを強めている様子がうかがえる。分野別では、製造業の生産に底堅い動きがみられるものの、鉱業部門における生産下振れの動きが生産全体の重石となっているほか、経済活動の動向に連動する傾向がある発電量が2ヶ月連続で減少するなど、足下の景気が頭打ちの様相を強めている状況を反映しているとみられる。なお、製造業のうち資本財や中間財関連の生産は堅調な推移をみせているものの、インフラ関連や建設素材関連の生産は弱含みする動きがみられるほか、消費財についても耐久消費財を中心に生産が頭打ちの動きを強める様子が確認されており、生産活動を取り巻く環境に不透明感が高まりつつある。

図1 IN インフレ率の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図2 IN 鉱工業生産の推移

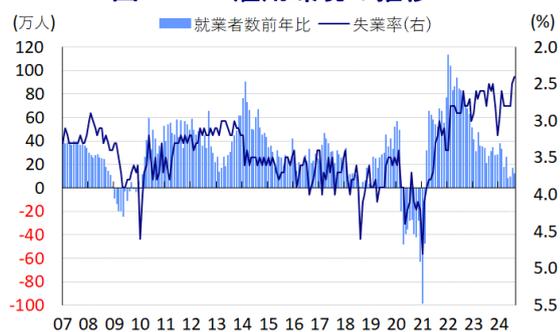


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成, 季調値は当社試算

[韓国]～失業率は統計開始以来の低水準に改善も、雇用環境の厳しさから労働市場からの退出は活発化～

11日に発表された8月の失業率（季調済）は2.4%となり、前月（2.5%）から0.1pt改善しており、過去に遡って統計が入手可能な1999年6月以降で最低水準となっている。失業者数は前月比▲1.6万人と前月（同▲8.4万人）から3ヶ月連続で減少しており、中期的な基調も減少傾向で推移するなど調整の動きを強めている。年代別では10代と50代で拡大が確認されているものの、これら以外のすべての年代で調整の動きが確認されているほか、なかでも20代で調整の動きが加速している。一方の雇用者数は前月比+1.4万人と前月（同+1.9万人）から3ヶ月連続で拡大しており、中期的な基調も拡大傾向に転じるなど底入れの動きを強めている。年代別では50代や60代以上といった高齢層を中心に減少が確認される一方、これら以外のすべての年代で拡大している上、20代で拡大の動きが加速している。ただし、雇用形態別では正規雇用で調整圧力が強まる動きがみられる一方、対照的に非正規雇用で拡大する動きが確認されており、足下の雇用拡大の動きは若年層の非正規雇用者を中心に進んでいる様子がうかがえる。失業率は改善しているものの、雇用を取り巻く環境の厳しさを反映して労働力人口は前月比▲0.0万人と前月（同▲0.6万人）から4ヶ月連続で減少するなど労働市場からの退出の動きが広がっており、年代別では20代といった若年層に加えて、60代以上の高齢層でも退出の動きが確認されている。よって、表面的な失業率の改善と内実との間でギャップが広がっているものと捉えられる。

図3 KR 雇用環境の推移

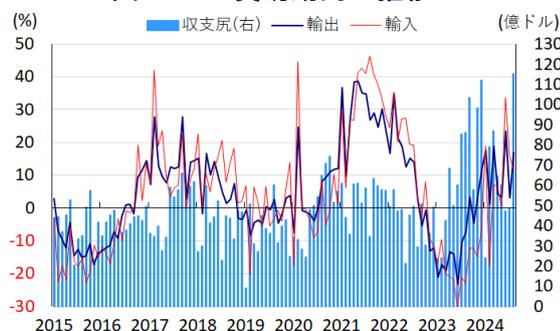


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[台湾]～輸出は底入れの動きを強める一方、商品安も影響して輸入は下振れして貿易黒字額は過去最高に～

9日に発表された8月の輸出額は前年同月比+16.8%となり、前月（同+3.1%）から伸びが加速している。前月比も+8.4%と前月（同▲1.7%）から2ヶ月ぶりの拡大に転じるなど一進一退の動きをみせているものの、中期的な基調は拡大傾向を強めるなど底入れが進んでいる様子がうかがえる。財別では、主力の輸出財である半導体をはじめとする電子部品関連の輸出が堅調に推移していることに加え、化学製品関連や金属製品関連、プラスチック製品関連といった素材・部材関連の輸出が大きく上振れするなど、幅広い分野で輸出が底入れの動きを強めている。国・地域別でも、最大の輸出相手である中国本土向けが底入れの動きを強めているほか、米国向けやEU向けのほか、アジア新興国向けなども堅調な動きをみせているものの、日本向けに下押し圧力が掛かるなど対照的な動きもみられる。一方の輸入額は前年同月比+11.8%となり、前月（同+16.2%）から伸びが鈍化している。前月比も▲8.7%と前月（同▲2.4%）から2ヶ月連続で減少するなど頭打ちの動きを強めているものの、中期的な基調は拡大傾向を維持するなど底入れの流れが大きく変化している状況にはないと判断できる。財別では、食料品関連や金をはじめとする宝飾品関連の輸入に堅調な動きがみられる一方、輸出が比較的堅調な推移をみせているにも拘らず機械製品関連などの輸入が大きく下振れしているほか、商品市況の調整の動きを反映して金属関連やエネルギー関連の輸入が下振れしていることも輸入全体の重石となっている。結果、貿易収支は+114.93億ドルと前月（+48.34億ドル）から黒字幅が拡大して単月ベースで過去最高を更新している。

図4 PH 貿易動向の推移

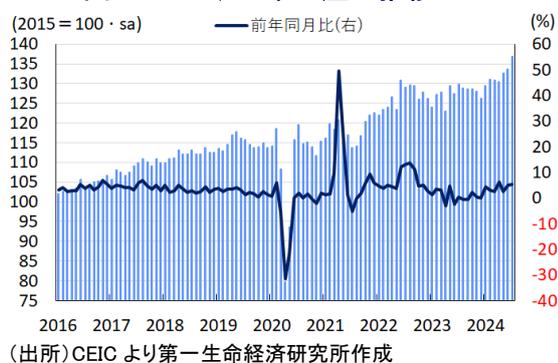


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[マレーシア]～主力の電子部品関連や鉱業部門の生産は鈍化するも、これら以外で生産拡大が確認される～

10日に発表された7月の鉱工業生産は前年同月比+5.3%となり、前月（同+5.0%）から伸びが加速している。前月比も+2.38%と前月（同+0.72%）から3ヶ月連続で拡大しており、中期的な基調も拡大傾向で推移するなど底入れの動きを強めている。分野別では、底入れの動きを強めてきた原油や天然ガスなど鉱業部門の生産に下押し圧力が掛かる一方、製造業の生産で底入れの動きを強めているほか、経済活動の動向に連動しやすい発電量も拡大に転じるなど、幅広く経済活動が活発化している様子が見え始める。なお、製造業のなかでは主力の輸出財である半導体をはじめとする電子部品関連の生産は下振れしているほか、金属関連など素材・部材に関連する分野の生産も鈍化している一方、自動車をはじめとする輸送用機械関連の生産は底入れしているほか、化学製品関連などの重化学工業に加え、縫製品関連や食料品関連といった分野で生産拡大の動きが広がっており、生産全体を押し上げている。

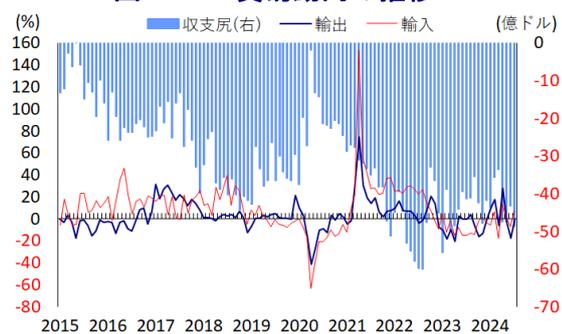
図5 MY 鉱工業生産の推移



[フィリピン]～中国による「経済的威圧」の影響が輸出の重石となるも、頭打ちが続いた流れに底打ちの兆し～

10日に発表された7月の輸出額は前年同月比+0.1%となり、前月（同+17.3%）から3ヶ月ぶりにわずかながら前年を上回る伸びに転じている。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比も3ヶ月ぶりの拡大に転じるなど頭打ちの動きに変化の兆しが出ているものの、中期的な基調は減少傾向で推移するなど頭打ちの流れが大きく変化するには至っていない。財別では、主力の輸出財である半導体をはじめとする電子部品関連の輸出が底入れの動きを強めていることが輸出全体をけん引している。国・地域別では、このところの関係悪化も影響して最大の輸出相手である中国向けに下押し圧力が掛かる一方、米国向けや日本向けのほか、EU向けやASEANをはじめとするアジア新興国向けに総じて底動きが確認されている。一方の輸入額は前年同月比+7.2%となり、前月（同▲7.3%）から2ヶ月ぶりに前年を上回る伸びに転じている。前月比も3ヶ月ぶりの拡大に転じるなど頭打ちの動きに変化の兆しが見られるものの、中期的な基調は減少傾向で推移するなど大きく流れを変更させるほどには至っていない。輸出の堅調さを反映して電子部品をはじめとする素材・部材関連の輸入に底打ちの動きが出ていることに加え、機械製品関連の輸入も堅調な推移をみせているほか、鉱物資源関連の輸入額が拡大するなど幅広い分野で輸入が底打ちしている様子が見え始める。結果、貿易収支は▲48.99億ドルと前月（▲43.23億ドル）から赤字幅が拡大している。

図6 PH 貿易動向の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

以上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任を負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。